

世界3の過密性と客観的知識の成長について

池田健人（人間科学研究科科学哲学）

カール・ポパーは、唯物論ないし独我論的な主張、または多元論的世界観の伝統に位置する二元論的な主張に対してさえ挑戦して、少なくとも3つの世界を存在論的に区別する理論を提案した。これは、一般にポパーの三世界論として議論のされているものである。

ところで、少なくとも3つの世界を存在論的に区別しようとする発想それ自体は、20世紀においてもそれほど目新しいものではなかった。たとえば、主な三世界論の提唱者としてディルタイやジンメルらの名は有名であるし、ポパー自身もその理論の近似としてヘーゲルの客観精神やボルツァーノの命題自体の世界および真理自体の世界、フレーゲの客観的思考内容の世界などを挙げている。もっといえば、アメリカでは、サンタヤナやウェイスらによって四世界論の研究すらも行われていた。

では、いったいどのような点においてポパーの三世界論は独自の性質を有するものであるといわれるのだろうか。このような疑問に対して回答を与える方法には複数のものが考えられうるが、本発表では、とりわけ3つの世界の間での相互作用に焦点を絞って検討する。エックレスが、その哲学的基盤を試行主義的相互作用論と評価したように、ポパーの3世界論において相互作用の果たす役割は大きい。たとえばポパーは、プラトンが、世界3とそれが私たちに対して及ぼす影響の発見者であったことを認めているが、そこで意図されていた世界3としてのイデア界は至高の完全性であり、不変の神的な要素を含んでいたのに対し、ポパーの世界3は世界2からの働きかけにより変化するものである。ポパーは、客観的知識を成長させる批判的討論そのもの、また物理的状態や意識的状態との類比において、その状態を世界3のもっとも重要な存在者であるとみなしている。それゆえ、それは真なる理論だけでなく偽なる理論、また推測および反駁をも含んでいる。

ここで、推測および反駁の過程とは、批判的討論を成立させるある問題状況における矛盾が、試行と誤り排除によって取り除かれていく過程のことである。それゆえ、ポパーは探索され、除去されるべき対象として世界3に矛盾の存在を認める。しかしギルロイによれば、それは、私たちが入手しうるあらゆる知識は、人間精神によって最初の矛盾が産出されたとき、自律的に派生したという不合理な主張を正当化するものである。なぜなら矛盾は、古典論理にしたがえば、その真偽にかかわらず、あらゆる命題を演繹的に導出しうるからである。コーエンはこの事態を指して、世界3は過密であり、したがって客観的知識の成長はありえないと主張した。

しかし、本当にそうなのだろうか。むしろ、ポパーは客観的知識の成長のためにこそ、消極的な仕方ではあれ、矛盾を要請していたのではなかったか。今回の発表では、世界3の過密性にもかかわらず、客観的知識はいったいどのようにして成長するのかを示すことを目的とする。